

令和5年度 報告書

2023年9月14日(Thu.)～9月22日(Fri.)

# 東京大学文学部夏期特別プログラム

Report on the Special Summer Program of the University of Tokyo Faculty of Letters,  
September 14-22, 2023 in Hokkaido

ワッカ原生花園のハマナス







## 目 次

1. 巻 頭 挨拶	
「予測しない出会いの経験」	
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 納富 信留	2
2. サマープログラムの概要	3
3. プログラム実施内容	4
4. 受講者レポート	7
① 石井 誠子	【教養学部1年】
② 田嶋 真寛	【工 学 部 3 年】
③ 難波 和太	【教養学部1年】
④ 水野 千絵	【教養学部1年】
⑤ 宮川 理芳	【教養学部2年】
⑥ Gurjar Adit Amod	【教養学部2年】
⑦ Kasai Reira (Layla Hunt)	【教養学部2年】
⑧ Mambetov Adilzhan	【教養学部2年】
⑨ 謝 雲舒	【教養学部1年】
⑩ Yee Kiko Shan Ning	【教養学部2年】
5. 総 括	
第9回夏期特別プログラムを終えて	
東京大学大学院人文社会系研究科・准教授 松田 陽	16



## 予測しない出会いの経験

本年度の東京大学文学部夏期特別プログラムでは、北海文化研究常呂実習施設等を会場に実習や講義が行われ、東京大学で学ぶ日本人学生と留学生の計10名が参加しました。新型コロナウイルスが5類に移行し、比較的自由に行動できるようになってから初めての開催となりました。引率や講義にあたっていただいた先生方、関係者の皆様に大変お世話になりました。まず、心より御礼申し上げます。

本特別プログラムをはじめ、東京大学では各種の体験活動プログラムが用意されており、学生は国内外で様々な研修や活動に参加することができます。40年ほど前に私が大学生生活を送った頃には、このような選択肢はほとんど存在しませんでした。現在提供されている各種プログラムや海外留学先のリストを見ると、まったく夢のような話に感じられます。学部生から大学院生や留学生まで、条件はあるにせよ、希望や計画により有意義な企画に主体的に参加し、学生生活をより充実したものにする機会に溢れているからです。

しかし、こういった企画はプログラムとして綿密に整備されていますが、それに乗り込むだけでは不十分であり、本来の意義を獲得することはできません。新たな経験をする意義は、計画され予測されたことから外れた、それを越えたところにあるからです。行く場所、見るもの、そこで得られる情報は、もしかしたらネット上であらかじめ知ることができるかもしれません。さらに、そこには以前にそれを経験した人々による感想や評価が、きれいな写真つきで公開されているかもしれません。しかし、それらの情報は、自分が、ここで今、新たに経験とはまったく別物です。むしろ、そういった先入見を完全に離れて、出会いをそれ自体で楽しむことが求められていると言えるでしょう。

大学や企画者がつくったレールの上で安全に楽しむ旅行は、いわばバスの車内から景色を眺めるツアーにすぎません。そこでの体験は、実際には既成の期待をなぞるにすぎないように見えます。そうではなく、自分の足で歩き、時に迷い、仲間や外の人たちと向き合って話す、そんな偶発を得るために、それらのコースはあるのです。

出会いとは、計画し予測して得られるものではありません。また、出会うためにはこちら側にもいくつかの条件が要求されます。未知なものに対面する感性、勇気、忍耐です。初めての経験、知らない人、行ったことのない土地は、私たちに不安や恐れを抱かせます。あえてそれを経験するには膨大なエネルギーが必要であり、場合によっては対立したり、なにか思いがけない感情を受けることもあるでしょう。しかし、それに挑んで乗り切ることが、その出来事を真に固有な経験へと鍛え上げてくれます。

夏期特別プログラムに参加した学生の皆さんも、これから同様の体験企画に参加する皆さんも、そういった貴重な出来事を若い時期にぜひ経験し、一生の得難い思い出にしてもらいたいと思います。それが、私たち企画し準備する側の願いです。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

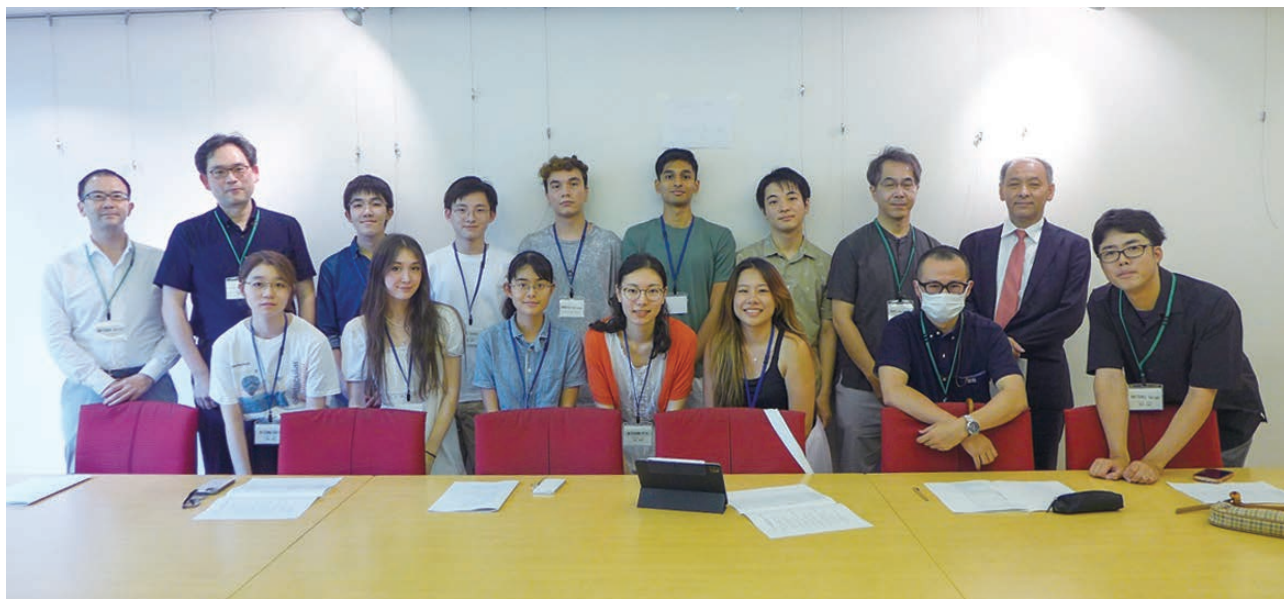
納富 信留



## 2 サマープログラムの概要

実 施 期 間	●	2023年9月14日(木)～9月22日(金)
内 容	●	●9月14日 プログラムの趣旨説明・ガイダンス(本郷キャンパスにて)  ●9月15日～9月22日 人文社会系研究科附属常呂実習施設(北海道北見市常呂町)でのプログラム ・北海道の先史文化概説(講義) ・北見市、網走市、美幌町、斜里町周辺の遺跡、博物館の見学 ・世界自然遺産知床の見学 ・北見市端野町の鎖塚と佐呂間町栃木地区の見学 ・「環状列石と環状木柱列：英国と日本の比較」(講義)
担 当 講 師	●	熊木 俊朗(人文社会系研究科 教授) サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所長)
募 集 方 法 等	●	2023年4月に人文社会系研究科より告知。選考後、6月中旬に通知。
受 講 者	●	本学の学部学生10名【前期課程学生9名、後期課程学生1名】(うち留学生5名)
支 援 者 (プログラムに同行)	●	堀江 宗正(人文社会系研究科 教授) 太田 圭(人文社会系研究科 助教) 夏木 大吾(人文社会系研究科 特任助教)
協 力	●	北見市教育委員会等

# 3 プログラム実施内容



開講式 集合写真

今年度の東京大学部夏期特別プログラムは、東京大学に在籍する学部生5名と外国人学部留学生5名を対象に実施された。初日の開講式およびガイダンスでは納富信留研究科長および座長である松田陽准教授が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、今回のプログラムにおける各人の抱負を語った。二日目以降は、北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。受講者たちは附属の学生宿舎に泊まりながら課題をこなし、フリータイムや自炊の時間を通じて受講者同士や参加スタッフとの交流を深めた。雨天の影響等により一部の予定変更も生じたが、プログラムは概ね予定どおり進行した。最終日には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

## ● 北海道の先史文化概説（講義）

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木俊朗講師が「Prehistory in Hokkaido」と題し、北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、旧石器時代から縄文、続縄文時代、オホーツク・擦文文化、そしてアイヌ文化の成立に至る考古学的な歴史の流れを、本州やロシア極東との交流・影響関係にも注目しながら順を追って解説した。専門性の高い講義内容ではあったが、受講者からは、地域社会の形成過程とその背景に関して活発な質問がなされ、北海道における独特な先史文化に対する関心の高さがうかがわれた。



常呂学生宿舎での生活（夕食の準備をする参加者）



常呂実習施設での考古学講座





常呂実習施設周辺の遺跡見学（ところ遺跡の森にて担当講師の解説を受ける参加者）

### ● 実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」のところ遺跡の森地点、トコロ貝塚、トコロチャン跡遺跡を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。遺跡の森地点では、地表面に窪みで残る竪穴住居跡や、復元された竪穴住居等を見学した。また、隣接する東京大学常呂資料陳列館やところ遺跡の森で実際の遺跡出土品を観察することで、当時の生活をより具体的に知ることができた。遺跡の現状と周辺の景観を実際に見ることで、歴史遺産を体感し、地域における歴史の歩みを深く理解することができた。

### ● 世界遺産 知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産

への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む移動は全て車で行き、斜里町立知床博物館、知床世界遺産センター、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。参加者は知床峠や知床五湖等の巡検を通じて美しい海や山々の雄大な自然に触れながら、北海道における豊かな地域生態を学ぶことができた。

### ● 博物館見学

東大常呂実習施設の近隣に位置する各博物館、具体的には、ところ遺跡の館（以上北見市常呂町内）、網走市立郷土博物館、モヨロ貝塚館、北海道立北方



世界遺産 知床見学（知床五湖を散策する参加者）



博物館見学  
（網走市モヨロ貝塚館にて担当講師の解説を受ける参加者）

### 3 プログラム実施内容

民族博物館、博物館網走監獄、美幌博物館を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は考古学・民族・近代資料や歴史的建造物を見学しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。参加者は各館において北海道の歴史・自然・民族を活かした特色ある展示を熱心に見学し、当時の人々の暮らしや社会的背景について活発に議論する姿も見受けられた。

#### ● 北海道における近代開拓史を学ぶ

近代開拓の歴史を学ぶことは今日の北海道の成り立ちを知るうえで重要であるが、それを深く理解するうえでは歴史の負の側面にも焦点を当てる必要がある。このような認識に基づいて、堀江宗正教授が講師を務め、北見市端野町の鎖塚と佐呂間町栃木地区を訪れ、現地で開拓や移住の実態について学んだ。鎖塚では、北見市職員による解説を受けながら、今日の道東北の発展にもつながる中央道路の開削が囚人達の強制労働によってなされた当時の時代背景、そして慰霊碑供養に至る地元住民の活動について学んだ。佐呂間町の訪問では、佐呂間町長や多門寺住職の解説を受け、足尾銅山鉱毒事件に端を発する栃木からの移住の経緯、そして郷里とは大きくことなる厳しい環境を切り開く人々の実状を知ることができた。参加者は、佐呂間高校の学生と交流し、ともに地元の歴史について学ぶことができた。



佐呂間町栃木地区の見学（佐呂間町長による資料解説を受ける参加者）

#### ● 環状列石と環状木柱列：英国と日本の比較

セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー所長を講師として招き、“Stone and wooden circles: comparing Britain and Japan”と題した講義が行われた。講義では、研究史初期におけるストーンヘンジの科学的研究、日本における先史考古学研究の成り立ち、日英の先史文化の比較研究、歴史遺産の活用にかかわる研究交流について解説された。また、講師がイギリスで取り組む「Later Prehistoric Norfolk Project」を紹介し、人が豊かに生きるための歴史遺産の活用と役割について、その枠組みを分かりやすく説明した。受講者は、歴史遺産の活用に関する具体的な実践例を知ることによって、社会における歴史遺産の役割や普遍的意義などについて学んだ。



セインズベリー日本藝術研究所のサイモン・ケイナー所長による特別講座



# 4 受講者レポート

## ● 負の遺産の継承

明治期における北海道の開拓は地域の発展に寄与したと言われる。しかし、一見明るく見える側面の背後に多数の犠牲があったことを忘れてはならない。当時の日本はロシア帝国の南下政策に伴う脅威に直面していた。明治政府は北方警備拡充や軍需物資の輸送を目的として札幌から網走までを結ぶ中央道路の開削を急いだ。そのうち北見―網走間の工事に動員されたのが網走集治監の囚人だった。囚人たちは8カ月というごく短期間で約163kmに及ぶ道路を完成させたが、栄養失調や劣悪な衛生環境などにより命を落とす人が相次いだ。彼らは逃亡を阻止するために鎖に繋がれ、死後はそのまま道路脇に葬られたという。のちに鎖に繋がったままの人骨や墓標として用いられた鎖が多く見つかった鎖塚は、当時の労働環境の過酷さを物語っている。

道路開削や過酷な労働環境、それに伴う犠牲について学ぶ中で、この夏訪れた泰緬鉄道にまつわる歴史との重なりを感じた。泰緬鉄道は太平洋戦争の戦況により日本軍の海上輸送が困難になる中、海路に代わるビルマとタイの間の物資輸送路として建設が進められたものだ。労働力として連合軍の捕虜やアジア人労働者が動員され、中央道路の場合と同様、完成を急いで突貫工事が行われた。断崖に沿って木橋を架けるなど工事は危険を伴い、さらに栄養失調や伝染病などで夥しい犠牲者を生んだ。

中央道路と泰緬鉄道はどちらも軍事的な理由を背景に建設されたという共通性をもつ。歴史は繰り返すと言ったらクリシェになってしまうが、いつの時代でも戦争やそれに伴う非人道的な行為は絶えない。人々は一般的に平和を望むものだと私は信じていたい。しかし過去の事例を見るに、いくら戦争はダメだという共通認識があったとしても、一度戦争が始まってしまうと一般人がそれを止めるためにできることは少ないのかもしれない。そんな無力さを前にして、それでも負の遺産を語り継ぐ意義は何かと問われたときに、筋の通った考えを述べられるほど今の自分の思考はまとまっていない。もちろん、記憶の風化は阻止するべきだ。犠牲者のことを忘れ去り、彼らがいなかったふりをするとしたら、それは人の命の尊厳を踏み躪ることになる。

鎖塚や中央道路について話してくださった北見市市史編集係の斎藤幸喜さんや、栃木地区のブラックツーリズムに力を入

れる佐呂間町の武田温友町長は、歴史の爪痕を語り継ぐことに熱意を注いでいた。その熱心な姿勢から、歴史的事実を未来への戒めとして利用することだけではなく、過去へ思いを馳せること自体にも、やはり何らかの意味があると感じた。歴史は単なる過去の出来事の羅列ではない。背後にあるストーリーを含めた歴史を学ぶことの意義について考えさせられた。

(文責：石井誠子)

## ● From Yanaka to Saroma: The Spirit of Tochigi's Pioneers

The afternoon of our fifth day in Hokkaido was spent in the Tochigi district of Saroma, which was first settled by people from Tochigi, or more specifically, the village of Yanaka. The ostensible peculiarity one might find in the existence of a community of people from one small village in the mainland of Japan settling in one of the northernmost areas of the country ought to be understood in the broader context of the rapid modernization of Japan.

It all began in the copper mine of Ashio, which accounted for nearly forty per cent of Japan's total copper production in the early twentieth century. However, this indispensable propellant of the then-industrializing Japan also brought about unwanted side-effects in the form of severe environmental pollution, to which downstream villages such as Yanaka fell victim. Their lands were rendered uncultivable, and a desperate effort was made by the local MP, Tanaka Shozo, and the villagers to inform the government of the plight they were facing. Despite all this, the decision was made to evict all the villagers of Yanaka and transform the area into a colossal basin to prevent the pollutants from flowing further downstream to the capital, Tokyo.

While most of the evicted villagers chose to start new lives in neighboring villages, some decided to move to Saroma, which they had been told had vast and fertile land. 240 villagers set forth from Oyama station in Tochigi on 7 April 1911. However, after a week-long arduous journey north, their hopes for a better life on the northern island were utterly dashed at the sight of a snow-covered wild forest. Despite the population being reduced to a mere 98 in the first three years, they undertook the task of clearing the forest, levelling the ground, and soon, the first harvest followed. An elementary school, temple, and shrine were also established within a few years, supporting the villagers' lives both spiritually and intel-



北見市端野町鎖塚の供養碑



## 4 受講者レポート



斜里町知床へと向かう道

lectually ever since.

However, even though their efforts crystallised in the form of stable agricultural output, the sense of longing for their ancestral land of Tochigi never faded away, and such sentiments have resulted in severe rifts on the green every now and then throughout the village's history. The most significant of these rifts occurred after a visit by the then-governor of Tochigi in 1969. Subsequent nationwide television coverage, which sensationally emphasized the 'plight' of the people living in the 'remote and deprived village', exacerbated the situation.

Yet, despite the ignominy unjustly put on by the media coverage and the rift that developed amongst the villagers, the community looked forward and soon collaborated to modernize their agriculture. The year 2013 marked the centenary of the district's establishment, and a delegation from the village visited Tochigi prefecture that year, a gesture symbolizing the overcoming of past troubles and paying tribute to their forebears.

I found the history of the district quite fascinating. Even though many of us might think we have no connection whatsoever to this small district, we, in fact, owe them a great deal. Their forebears' right to live on their own land was sacrificed in the pursuit of the nation's material wealth, from which we continue to benefit until today. A significant portion of the dairy products we consume at home daily come from small farming villages like Tochigi in Hokkaido. We must not allow ourselves to forget that the shift from traditional forms of agriculture to dairy production was often made out of necessity, as it was virtually the only way they could ensure a stable income regardless of weather conditions.

As the town mayor, who gave us a lecture on the dis-

trict's history, hoped we would, I have learnt much about both the cruelty and strengths of humanity from my experience in Tochigi. Our society is an organic system composed of various interests and sentiments intertwined. We all hope to look forward and progress, but as the story of the people of Tochigi shows, predicaments are often introduced by our fellow humans. The story of Tochigi reminds us of the resilience humans can have in the face of adversity. Their narrative underscores the importance of understanding sacrifices made by those who came before us, and respecting what others draw strength from, be it ancestral land, family, religion, or a sense of belonging.

(文責：田嶋真寛)

### ● サロマ湖と人々のかかわりから～妄想する考古学～

サロマ湖は三方を北見市内の湧別町・佐呂間町・常呂町に囲まれ、北はオホーツク海に接する汽水湖(現在の湖水はほぼ海水)である。常呂実習施設に我々がやってきた日、私たちは夕陽をたたえ煌煌と輝く黄昏時の湖と、静かな闇の中で星を散りばめた夜空と対峙する湖の両方の、圧倒的な美しさを目の当たりにして息をのんだことを今でも鮮明に記憶している。

そんなサロマ湖も、長い地球史とともに姿をダイナミックに変え、常呂の地に営みを続けてきた人々に大きな影響を与えてきたのではないだろうか。常呂で発見された人類の生活の痕跡としてもっとも古いものは約2万年前の旧石器文化期のものである。当時は海水準が現在より約45メートル低く、常呂川や佐呂間別川に削られた谷が広がっていたという。常呂で人類の継続的な居住が確認されるのは縄文時代早期、約8,000年前からである。この頃は気候が温暖で湖が存在せず、オホーツク海と直結する東西サロマ湾・トコロ湾が広がっていた。この頃常呂で生活を営んだ人々は湾越しに雄大なオホーツクの海を日々眺め、漁をし、暮らしていたことだろう。しかし縄文時代前期の6,000年前にかけて温暖化がピークを迎えると、海面は現在より3～5メートルほど高くなり、浸食された沿岸部の陸地の土砂が内湾に堆積して浅くなった。約4,500年前の縄文中期にかけて地球が再び寒冷化するうちに、海面が低下し、三つの湾は潟湖となった。縄文前期から中期にかけての時期を生きた人々は、少しずつ姿を変え、湖へと変容しつつあるサロマの姿の目撃者だったのである。さらに時代が進み、縄文晩期の約3,200年前までには、海への出口を遮断された西サロマ湖から湖水が溢れ、東に流れ込んで一つのサロマ湖が成立した。トコロ湖は擦文文化が栄えた約1,000年前までには常呂川の土砂運搬作用によって陸化し、低湿地に変化したようだ。ここまで見てきただけで、この2万年間にここサロマの地形は谷、湾、湖/低湿地と姿を変えてきたわけである。





サロマ湖岸から見た夕陽

ダイナミックな変化の裏で人々の暮らしはどうなったのだろうか。発掘された遺物が直接教えてくれるのは、土器の姿形からわかる年代と、遺跡・人骨や食べかすなどからわかる当時の生活環境や集団の構成ばかりである。もちろんそれらに加えて、儀礼の在り方や生活のサイクル、精神性など、遺物の使用状況や発掘状態から二次的に想像できることも多くあることをこのプログラムの中で学んできた。しかし、遺物からでは彼らがどう思い、何を感じ、営みを繰り返したかは知りようもないだろう。そこで私にはこんな妄想が浮かんだ——縄文時代早期後半、上昇する海面を逃れ、家を少し高いところに建て替える人々。また海面は上昇し、家を建て替える。絶望に苛まれただろうか、それとも案外なんとも思っていなかったかもしれない。縄文中期、潟湖になった元サロマ湾を見て、子供がはしゃいで砂州を走っている。外洋に出られないことを嘆く者もいれば、オホーツク海に比して穏やかになったサロマ湖で泳ぎながら貝集めをできると喜ぶ者がいる——。一気に縄文人の生活が身近になった気がする。案外こんなものだったかもしれないし、もっとシリアスな生活上の変化に怯えていたかもしれない。私たちには測りえない太古の人だからこそ、私たちに引き付けて考えてみる。たくさんの可能性を妄想し、過去を知ろうと想像する。そんな営みが考古学であるように思えてくる。

話をサロマ湖と人々のかかわりに戻そう。サロマ湖畔の常呂ではオホーツク文化の遺跡も、擦文文化の遺跡も、アイヌ文化期の遺跡も見つかっている。まだまだ謎が多いオホーツク文化に加え、擦文文化・オホーツク文化・アイヌ文化のつながりも分かっていないことがたくさんある。サロマ湖という大きな地理的条件も含め、このサロマという土地でこれほど長期にわたって私たち人間が営みを続けてきた理由を探る考古学研究はまだまだ道半ばである。そこで私は妄想と想像について考える。ひょっとすると妄想が一つの仮説を生むかもしれない。間違っているとしてもそれは構わなくて、そうして生まれた妄想が想像的な可能性として積み重なり、やがて発掘資料と整合する日が来るかもしれない。考古学の面白さはそこにあって、失敗/成功の二元論で測れない人文社会系の学問だからこそできることかもしれない。そんな気付きを与えてくれたサロマ湖と、

常呂実習施設に感謝をしつつ、これからどんな妄想が/想像が考古学の発展につながっていくかに思いを馳せると、興奮抑えがたく思われるばかりである。(文責：難波和太)

## ● 人々の生きた跡

今回、プログラムを通して、博物館にある様々な展示を見て、これまで生きてきた人々の息づかいを感じた。その人々は現在の私たちと同じように、日々の生活の中で、喜んだり、悲しんだり、笑ったり、寂しかったり、楽しかったりしたのだらうと思った。

網走市立郷土博物館には、初代館長の米村喜男衛と親交のあったレヌエケシというアイヌが作った、アイヌの人々の家屋の再現ジオラマがあった。展示から米村とレヌエケシの繋がりが垣間見えたようだった。解説によると、ジオラマを作った昭和11年、レヌエケシは既に81歳だったという。展示が作り込まれていることから、恐らくレヌエケシは饗曇とした人だったのだらうと思い、身近にいる、歳を取ってもまだまだ元気な人々を思い出した。レヌエケシに会ったことはないが、その存在を感じられたような気がした。一方で、ジオラマに再現されたようなアイヌの人々の生活が、明治以降、破壊されていったことを考えると、複雑な気持ちになり、アイヌの文化や歴史について詳しく学ばなければいけないと思った。

プログラム中に訪れた多くの博物館には、昭和の暮らしを再現したコーナーがあり、地元の人々から提供されたのだと思われる様々なものから、当時を生きた人々を感じることができた。印刷物の字体から時代を感じた。美幌峠には美空ひばりが歌った『美幌峠』の歌詞が刻まれた歌碑があり、作詞家の名前よりも美空ひばりの名前の方が大きく刻まれているのを見て、歌碑を作った人々の美空ひばりへの思い入れが伝わってきた。美幌博物館の壁には、小さく、くっしーのイラストと解説が貼ってあった。くっしーが生き残っているのがとても嬉しかった。博物館網走監獄では、昔の受刑者が作った冊子や美術作品、書道作品が展示されており、当時の受刑者たち一人一人の人間味を感じた。『刑務所の中』という2002年の映画で網走ロケが行われた際の新聞記事もかなり展示されていて、当時の町の盛り上がり分かった。プログラムを通して、明治から現代までの北見や網走の町の歴史、そこに生きた人々を感じることができた。

今回、縄文時代、続縄文時代、オホーツク文化の人々の遺跡も見えた。古代の人々が生きた跡と、明治、大正、昭和、平成の人々が残してきた生活の跡を並行するようにして見ると、古代の人々にも、美空ひばりやくっしーのような存在がいて、現代の私たちのように様々な感情を抱きながら生活してきたのだらうと思った。しかし、土器や住居跡から当時の人々の息づかいを感じることはかなり難しかった。当時の土器や住居と、現在の器や住宅とがあまりにかけ離れていて、当時と現在とが中々結びつかないのだ。そんな中、オホーツク文化の人々が作った子熊の像を見たとき、当時の人々の存在をととても身近に感じられた。その子熊の像は、現代の雑貨屋で売られていそうな



## 4 受講者レポート



北見市トコロチャシ跡  
オホーツク文化期のクマの骨偶

ほど可愛らしく、それを作った人の存在をありありと感じた。当時の人々がその子熊の像を見てどのように感じていたのかは分からないが、それでも当時との繋がりを感ぜられた。

これまでの時代を生きてきた人々の息づかいを感じることができた8日間だった。(文責：水野千絵)

### ● 北海道「開拓」が意味すること

普段都内の電車ですら酔う私が、北海道に来てからは移動の全てが自動車なのにほとんど車酔いをしないことに気が付いた。特に車の窓が開いていたわけでもないし、まして突然三半規管が強くなったわけでもあるまいし、なぜだろうと少し考えて、道がどこまでもまっすぐだからだと思い至った。およそどこへ行くにも、道は文字通り地平線までまっすぐに伸び、遠くから来る自動車の影さえはつきりと認められる。車窓に映る一面のじゃがいも畑や実習施設のすぐそばのサロマ湖の風景はどこか大陸的で、どんなに疲れていても私は飽きずに外を眺めていた。車窓の風景はプログラム期間中の私の密かな楽しみであった。

しかし、堀江宗正教授による講義や北見市端野町にある鎖塚の見学、そして博物館網走監獄の見学を通して、私は車酔いがないし景色もきれいで良いなどと喜んでいた自分の軽薄さに気付くことになった。

現在の道道や国道の基礎となっているのは、明治24年、網走刑務所の囚人1500人以上が、5月から12の短期間で網走から北見峠までを開削した道路である。突貫工事ゆえに彼らは途中で山があらうと谷があらうと「まっすぐに」道路を敷かねばならなかったのだ。これは別名「囚人道路」とも呼ばれ、昼夜を問わない過酷な労働や栄養不足から実に6人に1人が犠牲になったと伝えられている。当時、政府はロシアの南下政策を危険視し、それに備えようと北海道開拓を急いでいた一方、国内では自由民権運動などに関わった政治犯・思想犯が多く収監されていた。政府はそうした人々を半ば口減らしも兼ねて北海道に送り込み、労働力として使ったのである。政府はいまだに彼らが政治犯だったことを公式には認めていないそうだが、近年ようやく、地元の有志らの手によって慰霊碑が各地に建てられ、名誉回復が進んでいるとのことだった。ほとんどの

犠牲者はろくに埋葬もされずに道端に重ねられ、また生き埋めにされた病人も多く、今でも時折人骨が見つかるのだと聞いた。

彼らが収監された網走刑務所は洋風の木造建築で、今では天窓から光が差し込む明るい場所となっている。高い天井は広々として見栄えが良いが、その分暖房はほとんど効かず、冬には零下20度にまでなった。そうした劣悪な環境にも関わらず、囚人たちは先に述べた道路開削だけでなく、広大な農地の開墾と耕作も担わされた。結果的に道路はその後の屯田兵の入植に役立ち、農作物は戦中・戦後の食糧不足解消に貢献することになった。北海道はいわば囚人たちによって拓かれた土地だったのである。博物館網走監獄に行く前に、道路開削の歴史を学び、鎖塚訪問も行っていたため、刑務所の掲示の語り口に若干の違和感を抱えながらの見学ではあったが、改めて北海道という土地がどのような歴史の上に成り立っているのかを深く知ることのできた体験だった。(文責：宮川理芳)



博物館網走監獄 舎房

### ● Thriving in Harsh Conditions: The Resilience of Hokkaido's Natives

Hokkaido, Japan's northern frontier, and the neighbouring Okhotsk region are characterized by unforgiving climates and challenging environments. Yet, the indigenous peoples who inhabited these lands demonstrated remarkable resilience and resourcefulness, ultimately thriving in the face of harsh conditions.

The Natives of Hokkaido, primarily the Ainu people, faced the extreme northern climate of the island, with long, harsh winters and relatively short growing seasons. To thrive, the Ainu developed a profound understanding of their natural surroundings. They relied on hunting, fishing, and gathering for sustenance. The harsh winters prompted the Ainu to create well-insulated traditional homes called "chise," constructed with natural materials like woven straw and bark. These structures not only provided



warmth but also served as centers for family life and communal activities. The Ainu also adapted to their environment by crafting warm clothing from animal hides and using traditional methods like snowshoes for mobility in snow-covered landscapes.

Similarly, the Okhotsk people, who lived in the coastal areas of the Okhotsk Sea, confronted the challenges of a cold and unpredictable maritime environment. Despite the harsh conditions, the Okhotsk people developed sophisticated seafaring skills and mastered fishing techniques that allowed them to exploit the abundant marine resources of the region. Their survival relied on expert navigation, knowledge of the seasons, and the use of boats crafted from driftwood and animal skins. These people adapted to their environment, demonstrating their resilience by building semi-subterranean dwellings for protection from the elements and relying on traditional methods for food preservation. A deep connection with their surroundings was observed and spiritual beliefs centered on nature were maintained along with sustainable practices such as hunting, fishing, and gathering. These indigenous cultures respected the balance of ecosystems and practiced responsible resource management, ensuring the long-term viability of their communities.

Moreover, the resilience of these cultures extended beyond their survival strategies. They fostered rich traditions, storytelling, and art that celebrated their unique identities. The Ainu, for instance, crafted intricate patterns on their clothing and practiced tattooing as a form of cultural expression. The Okhotsk people left behind artifacts that reflect their creativity and cultural heritage. They carved small figurines of bears and whales which were used during religious ceremonies. The name of Killer Whale in the Ainu language is Repun Kamuy, meaning 'offshore deity'.

In conclusion, the indigenous peoples of Hokkaido faced and triumphed over formidable challenges presented by their harsh environments. Their adaptability, deep knowledge of nature, and sustainable practices allowed them not only to survive but also to thrive, leaving a lasting legacy of cultural richness and resilience. The story of these communities serves as a testament to the human spirit's

ability to overcome adversity and adapt to the most demanding circumstances.

(Gurjar Adit Amod)



常呂町の夜空に浮かぶ天の川

## ● The Flora in Hokkaido

I knew very little about Hokkaido prior to applying for the 9th Summer Program of the Faculty of Letters of the University of Tokyo and so I reasoned that whatever transpired would be an adventure regardless. What I did not anticipate is how utterly breath-taking the stunning landscape of northern Hokkaido is. The wide open vistas and crisp fresh air was such a contrast to the urban sprawl of Tokyo, it was a refreshing change from the norm!

Flowers in Hokkaido: I was thrilled to discover that our itinerary included trips to various flower gardens and other similar botanical parks. To name a few, we visited the Koshimizu natural flower garden (小清水原生花園) – a haven for the *Hemerocallis Yezoensis* (a plant native to Eastern Hokkaido and the southern Kuril Islands), *Lilium Pensylvanicum* (also known as the Siberian Lily) and *Iris Setosa*. We also visited the Lake Saroma Wakka nature centre (ワッカ原生花園) which was home to the *Rosa Rugosa* (a species of rose native to Eastern Asia that grows close to coastal regions and sand dunes, hence its beautifully apt name, "Beach Rose" in English. It was evident that the authorities in charge of maintaining Hokkaido's natural environment go to enormous lengths to preserve and celebrate its native flora. The Beach Rose was taken to the UK 150 years ago as an ornamental flower so that other lovers of nature from around the world could enjoy this stunning creation. Whilst I fully agree with this floral cultural exchange so that the maximum number of admir-



## 4 受講者レポート

ers can admire such beauty it was not until I was fortunate enough to make this trip to Hokkaido that I truly appreciated the words of Okakura Kakuzo in "The Book of Tea," where he commented that the "ideal lover of flowers seeks them in their native haunts". I was beyond grateful to be able to see these incredible wildflowers in their natural setting.

Flowers Beyond Gardens: I was surprised to see that in Hokkaido, flowers are clearly not just confined to designated patches of land, for example they were also found at the gates of Saroma High School. Here we sat in on an inspirational lecture alongside the first-year students about the history of the local Tochigi District. We were reminded of the significance of willpower and thoughts and especially the importance of protecting our Tamashii. As well as the notion that whilst each of us as individuals may be physically small, our ideas and ambitions hold infinite potential.

At The Hokkaido Museum of Northern Peoples (北海道立北方民族博物館) we discovered a display of Iroquois cradle boards containing elaborate floral patterns used to carry and protect babies in North America. We also saw floral slippers made by the Athabaskan Indians, sewn together using beads and fur. The Abashiri City Folk Museum (網走市立郷土博物館) showcased beautiful Makiri, small knives used for daily tasks, again featuring floral patterns. Additionally, a floral Sitoki hung gracefully around a Tamasay, a beaded decoration worn by women during festivals and formal occasions. These various artifacts showed how flowers clearly played a significant role in the everyday life of the indigenous communities and helped form a harmonious bond between humans and their natural environment.

One of the most memorable encounters involving flowers during our journey was at the graves of the Abarashi prisoners who took part in the 220-km Central Road Excavation Project, a highway constructed by the inmates of the prison and which ultimately assisted in the development of Hokkaido. The excavation team faced gruelling conditions and were required to complete the 5.4-meter-wide road on a strict time limit. As well as this, to further spark a competitive spirit amongst the prisoners, a quota prize system was introduced. The long



サロマ湖岸で沈む夕陽を眺める

working hours combined with an outbreak of edema disease and malnutrition led to the tragic death of around 200 prisoners during the project, all of whom were buried with no gravestones or offerings. It was not until 1965, 76 years after the road's completion, that the late nun, Takahiro Hayashi, along with 120 volunteers, began to find the remains of the prisoners buried along the road. They made offerings to ensure that these souls could find peace and navigate their way to salvation and the afterlife. Even today, fresh flowers adorn their graves, highlighting the importance of honouring the memory of those who endured such hardships. The dedication to the preservation of nature as well as the admiration for flowers in all aspects of life and death stood out throughout this trip. I found inspiration in the deep-rooted history embedded in this remote corner of Japan and am most grateful I was given the opportunity to explore the natural wonders of Hokkaido.

(Kasai Reira (Layla Hunt))

### ● アムール川流域の秘密：オホーツク文化の起源とその影響

北見市に位置する東京大学常呂実習施設を訪れた際、オホーツク文化の深い歴史と独特な生活様式に触れる機会を得た。東京大学文学部常呂資料陳列館では、オホーツク文化の遺物や生活の様子を伝える展示を見ることができ、北海道立北方民族博物館では、彼らの狩猟や漁業に関する道具や技術の進化を学ぶことができた。これらの体験を通して、オホーツク文化の人々がどのような環境で生活していたのか、また彼らが歴史的背景の中でどのような役割を果たしていたのかをより深く理解することができた。

オホーツク文化は、日本の北部とロシア極東部にかけて展開された独特の文化であり、その起源や文化的背景は多くの研究から注目されている。斜里町知床博物館での観察



からも、彼らの生活様式や宗教行事が非常に独自であったことが伺えた。特に、知床の博物館では、オホーツク文化の人々が信仰していた熊の儀式に関する遺物が展示されており、これは後のアイヌ文化のイオマンテとも共通点があることが確認されている。事実、考古学的な証拠からも、オホーツク文化の影響が現代のアイヌ文化形成において重要であったとされている。さらに、佐藤(2009, 2021)らの複数の研究により、オホーツク文化の人々は遺伝的特徴において、現在アムール川下流域やサハリン北部に住む人々との類似性が指摘されている。特に、ミトコンドリアDNAの解析から、オホーツク文化の人々がアムール川下流域の出身であることが示唆されている。また、彼らはニヴフやウリチ、さらにアイヌとも高い遺伝的親和性を持っていたとされている。

これらの事実は、オホーツク文化が北海道のアイヌ文化の形成に大きく寄与しているだけでなく、東シベリア文化とも深いつながりがあったことを示している。北見や常呂でのフィールドワークを通じて、このような文化的・歴史的背景を持つオホーツク文化の多様性とその影響力についての理解を深めることができた。

アムール川流域を中心に広がる東シベリア文化は、その過酷な気候と広大な土地が生んだ独自の文化である。この地域の先住民は、狩猟や漁業を主な生活の基盤とし、アムール川やその周辺の湖沼を利用して生計を立てていた。彼らの生活は自然の恩恵を受けつつ、同時にその過酷な環境に適応することを求められていた。

北海道立北方民族博物館での観察を通して、この東シベリア文化の先住民たちの工芸品や道具、そして生活の様子についての詳細を知ることができる。彼らの使用していた道具や衣装は、オホーツク文化やアイヌ文化とも共通点を持ちつつ、その独自性を強く感じさせるものである。

オホーツク文化やアイヌ文化との関連性については、交易や移住を通じての文化的影響が考えられる。特に、アムール川流域とオホーツク文化の人々との間には、遺伝学的な証拠からも深い関係があったとされる。アイヌ文化とも、宗教的な背景や生活様式において、東シベリア文化からの影響を受けている部分が見られる。これらの事実から、東シベリア文化が北海道のオホーツク文化やアイヌ文化の形成に影響を与えたことは明らかである。

オホーツク文化、アイヌ文化、および東シベリア文化の間関係は、長い時間をかけて形成されてきた複雑なネットワークである。アムール川流域を中心とする東シベリア文化は、オホーツク文化に遺伝学的、技術的、そして文化的な影響を与えてきた。具体的には、北海道立北方民族博物館で見られるような工芸品や道具の形状、材質から、これらの文化間の交流があったことが示唆される。

アイヌ文化においても、東シベリア文化やオホーツク文化からの影響は否定できない。知床の博物館で観察されるアイヌの熊に対する祭りや、その他の宗教的儀式は、オホーツ

ク文化や東シベリア文化の影響を受けて形成された可能性が高い。また、これらの文化間での交易や人々の移動は、互いの文化の発展や変遷に大きく寄与してきたと考えられる。

オホーツク文化、アイヌ文化、東シベリア文化は、それぞれ独自の発展を遂げてきたが、相互に深い関係を築いてきた。北見、常呂、知床の博物館での実体験や観察を通じて、これらの文化間の交流や影響が如実に感じられる。特に、遺伝学的な証拠や考古学的な発見をもとに、それぞれの文化がどのように関わり合いながら発展してきたのかを理解することができる。このような深い相互関係を持つ三つの文化を研究することは、北海道や東アジアの文化的背景をより深く理解する上で非常に価値があると言えるであろう。



極北圏を中心に見据えた世界

#### (参考文献)

Sato, Takehiro, et al. "Mitochondrial DNA haplogrouping of the Okhotsk people based on analysis of ancient DNA: an intermediate of gene flow from the continental Sakhalin people to the Ainu." *Anthropological Science* 117.3 (2009): 171-180.

Sato, Takehiro, et al. "Origins and genetic features of the Okhotsk people, revealed by ancient mitochondrial DNA analysis." *Journal of Human Genetics* 52.7 (2007): 618-627.

(Mambetov Adilzhan)

#### ● 時代の裏側

1878年、栃木県渡瀬川沿いの漁民たちは、鮎の大量死を発見した。異変を感じたが、一体何が発生するかわからなかった。しかしそれ以後、樹木が枯れ始め、稲が立ち枯れることにより、農民たちはついに真の元凶である足尾銅山に目を向け、田中正造を中心に抗議活動を始めた。これは、歴史教科書にある足尾銅山鉱毒事件であり、日本初の公害事件だと知った。

しかしこの事件の裏側として注目すべき点は、住民に解決しなければならない問題が生じたことにある。すなわち、汚

## 4 受講者レポート

染された土地にはもう何も植えられないため、生計を維持するためには引越しをしなければならない。ゆえに住民の一部は、1911年において栃木から北へ向け、津軽海峡を越えて北海道に上陸し、そしてまた四苦八苦して極寒の「サロマ」という土地に辿り着いた。「サロマ」という名前はアイヌ語が由来で、「葦が生える川」を意味する。彼らは離れた故郷を記念するため、自分が開拓する土地を栃木と名づけた。

光陰矢の如く、ふいにもう1世紀が過ぎた。この中から入植者も離農者も多々あり、当初には全く人影のない地域であったが、今では安定した土地が広がっている。広い畑は真っ直ぐの道路の両側に分布し、その中にも建物が建てられている。先祖たちの労働や自分の故郷を記念するため、住民たちは栃木神社を築き、その中に「神木」とするオノキの木を植えた。この100年の間も、環境に関する法律が多く成立し、これからの未来において、足尾・水俣などのような災いが二度と起こらないように、栃木以外の人々も努力してきた。

92年前の9月18日において、満洲事件が勃発し、それを皮切りに日中両国間の戦争が始まり、両国の国民は戦場で必死に戦った。その中で戦争は高尚か卑怯か一切問わず、全てを押し潰した。歴史教科書では、どのような事件が発生したかしか記載することなく、その背後見えないところにある民衆の苦難は一切触れないようにした。しかし、それから1世紀近く経た現在において、両国においての彼らの子孫たちはその残酷な戦争を忘れずに、平和のために力を尽くして活動していた。

時代の偉力の前では、個人は微小で無力な存在だとは言っても過言ではない。時代にとってただの灰塵が個人にとっては山崩れとなり、時代にとってただの水滴が個人にとっては洪水となる。学生からは歴史教科書の1ページにすぎない部分に、無数の人々の一生がある。この冷たい文字の後ろでは、時代が苦難を作り、人の闘志を打倒し、人の精神を苦しめていた。それでもこの世界には、田中正造たちのように、身を捧げ、見えないところにある人々のために死ぬまで努力していた人がまだ多く存在する。

このような努力も、現代の我輩の責務でもある。時代の潮流が世間を席卷するときには、それに抵抗する人が不可

欠であり、それは、見えないところにいる人々も、尊厳的にこの世に生きられるようにするためである。概ねこれも、私たちが学習する目的であろう。  
(謝雲舒)

### ● The Relationship Between Man and The Natural Environment in Hokkaido

On our very first day here, we embarked on a long car ride from Memanbetsu airport to the University of Tokyo accommodations. During the car ride, I found it amazing how different the Hokkaido landscape was from Tokyo. The roads were much wider, and there were very few tall buildings. The scenery was very beautiful, with rolling hills and lush green fields. There were mountains covered in trees, and in the distance, we could see massive windmills. We drove past lakes and we also caught a glimpse of the sea, and the sparkling blue water contrasted against the summer green of the landscape was akin to the scenery in a Ghibli movie. The beauty of the Hokkaido countryside is truly one of a kind. When we finally reached the Tokoro Forest of Remains, we entered an unassuming road up into a wooded area. The forest was beautiful, as the sun was beginning to set, and we could see the sunlight filtering through the leaves, which marked a gentle and warm welcome for us to our accommodation.

That day, the 10 of us went to the lake to watch the sunset by Saroma Lake. By the time we got to the lake, the sky had turned into a soft pink colour on the right side of the lake, while on the left side of the lake it was dark dusky blue. It was truly a spectacular sight to see on our very first day in Hokkaido. We watched as birds flew across the water while the sky turned into a myriad of colours from purple to orange. While the scenery was awe inspiring, what really struck me as remarkable was the centuries of history we were standing on, and that people from the Jomon period also stood at the very same spot and looked out into the lake. I wanted to pick a shell to bring back as a souvenir but was advised against it, due to the importance of preservation and protection of the natural features of Saroma. That was when I began to wonder about the importance of preservation of nature as well as how to instill that practice into our interactions with nature.

After dinner, we went outside to see the night sky



佐呂間町栃木神社の神木





北見市ところ遺跡の森 復元住居

and look at the stars. Living in Tokyo, due to light pollution, one can rarely see stars or constellations. But in Saroma Town, the stars shone clear and bright, and we could even see the Milky Way trail. As I looked up at the night sky, I realised that the stars here were different from the stars back in Tokyo. It made me wonder whether the people who lived in Hokkaido in the past ever used the stars for navigation or for spiritual worship. As the week went by, I learnt more about the people who used to live in the area during the Jomon era, and I learnt that they were an extremely spiritual and artistic group of people, with a close relationship and respect for the surrounding nature and the environment, including the animals, as exemplified by their worship of the bear.

We visited many beautiful areas of Hokkaido in the following days, such as the beautiful Shiretoko Goko lakes, the Oshinkoshin waterfalls as well as the Lake Saroma Wakka Nature centre, where we learnt about the different flowers and fruits native to Saroma. Adil kept asking which of the plants were edible, and we learnt that a berry that we often saw around the the area was called a beach rose (ハマナス), and it could be made into jam. Learning about the flora and fauna of the area gave me a deeper understanding into how the people of the past in Hokkaido interacted and sustained themselves with the Hokkaido terrain.

As I gradually visited more areas in Hokkaido, I found myself growing an interest in the relationship between man and the environment. I learnt about the lives of people of the ancient Okhotsk culture known as the Moyoro people, and how they

interacted with the sea, and ate seafood for sustenance. To see that history in person at the shell mound museum really opened my eyes to how humans of the past in Hokkaido made use of the environment in a sustainable and efficient way.

When we explored the pit dwellings in the Tokoro Forest of remains, the notion of a strong relationship between the environment and man was apparent to me. The thousands of pits in Hokkaido, still preserved today, showcases how significant an impact mans' actions on the environment and the land have. It highlighted to me the importance of the preservation of such interactions in history, as well as the need to protect the natural beauty and landscape of Hokkaido, and anywhere in the world. During our last lecture, Professor Simon Kaner showcased how people of the past, not just in Japan or Hokkaido, had created structures such as stone circles in the past, and how significant these man made structures are now in today's society, that they are almost synonymous with nature itself. I realised that all interactions with nature should echo the interactions of humans of the past, where man made creations can coexist in harmony with the environment, to the point where it can become a part of the natural terrain.

Learning that people from different parts of the world, from the UK and Japan, place importance on monumentalising their memories in the natural terrain highlights the eons deep relationship that humans have with the environment, which manifests in a beautiful spiritual aspect of living. The importance of the Autumn equinox, the moon, the sun, and the death and lives of people are so complex and intertwined but still given extreme respect in the past. I do believe that we, as the humans of the 21st century, may have advanced technologically beyond the humans of the past but we do have a lot to learn from them in regards to our interactions with and respect for nature.

The trip to Hokkaido opened my eyes to many things but most importantly, I want to bring back a bit of the Hokkaido past with me to Tokyo, and begin treating the environment around me in a more sustainable and respectful way.

(Yee Kiko Shan Ning)

## 第9回夏期特別プログラムを終えて

第9回目となる文学部夏期特別プログラムが無事に終了した。過去2回と同様、留学生5名と日本人学生5名から成る計10名の学部生が参加するプログラムとなった。昨年度に引き続き、PEAK(Programs in English at Komaba: 東京大学教養学部英語コース)の学生が複数名参加してくれたことを嬉しく思う。

9月14日(木)から22日(金)に亘るプログラムでは、その活動の大部分を北見市常呂にある文学部実習施設を拠点に展開した。今年度の特色としては、人文社会系研究科死生学・応用倫理センターの堀江宗正教授による佐呂間町栃木地区の見学を行ったことが挙げられる。栃木地区は明治時代の足尾銅山鉱毒事件によって栃木県から移り住んだ人々が開拓した地であり、堀江教授はその移民の歴史について研究調査されている。調査と関連づけた見学は、佐呂間高校生たちと共同で行われることになり、夏期特別プログラムの新たな可能性を呈示できたと思う。

文学部が学術交流協定を結ぶ英国セインズベリー日本藝術研究所長のサイモン・ケイナー教授が直接常呂を訪れ、「Stone and wooden circles: comparing the prehistory of Britain and Japan」と題した講義をしてくださったことも大きな成果であった。世界遺産ストーンヘンジで終了したばかりの展覧会「Circles of Stone: Stonehenge and Prehistoric Japan」の立役者たるケイナー教授が、日英のストーンサークルという歴史文化遺産を通して国際性あふれる受講生たちに話しかける様子は、二重・三重の意味での国際交流だと感じた。

プログラムに参加して国際交流を遂げてくれた受講生たちに感謝する。彼らの感想や意見については、掲載している各自のレポートを参照されたい。

最後になりましたが、担当・参加・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

東京大学大学院人文社会系研究科

松田 陽





# 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属  
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



令和5年度  
文学部夏期特別プログラム  
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1  
発行日 2023年12月18日  
印刷 ヨシダ印刷株式会社





知床五湖から見たオホーツク海

東大文

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>



ワッカ原生花園のサンゴ草